

諏訪藩に残る鷹書

「赤生物数覚帳」及び

「飛驒西腕巢鷓鴣物数潮」について

代表 堀内 勝

メンバー

(五十音順)

その一 両書の全体解説

ここであつかう物数帳二篇は河西節郎氏所蔵の鷹書類の整理番号15の二冊である(『鷹書(大)』第一分冊、『国際研究』一一号二六二頁参照)。最初に紹介するのは「赤生物数覚帳」である(その二 本文、その三 解説)。通い帳スタイル六分冊からなっており、その中の第一分冊に当たる。赤生、即ち胸に赤斑のあるオオタカの雄「山鷹」、雌「中興」の狩で捕らえた獲物の物数の記録である。本稿に紹介するのはその中の両鷹の初年度の記録ということに

なる。雌雄両鷹が併記されているということは、恐らく同巢から取られた兄妹の巢鷹であろう。若鷹の初陣であるだけに、さすがに六分冊の中でも最も詳細に記述されている(十六丁)。ちなみに続く二分冊目から毎年の記録の分量を記すと、第二分冊・八丁、第三分冊・五丁、第四分冊・三丁、第五分冊・九丁、第六分冊・九丁、との構成になっている。そして第六分冊目で締めているところから、五鳥屋・六歳で記録が打ち切られていることになる。これを普通に断ずれば、この年を限度として鷹狩に用いられなくなつ(て、恐らく、その後野に帰され)た、と解釈できよう。

雌雄の物数は歴然とした相違を見せている。この年の獵期十一月(三月までの、どの月も中興(雌)の方が物数は多いし、その差は月を経るほど広がってゆく。そしてこの年の雌雄の物数のメは、中興一八三羽、山鷹一一七羽という結果になっている。同様にまた同格に訓育され、調教され、実獵訓練を受けた兄妹鷹、同じ血を分けたものでもこの差は出てしまう。オオタカは雌が遣われ、雄は遣いにくいといった定まった評価がこの「赤生物数覚帳」の中にもデータのにも明瞭に観察できる。

もう一点、雌雄の物数の対象は何であったかと言うことは一切記述されていない。狙った獲物は何であったのか、非常に関心が寄せられるところである。鴨や鳴、雉や山鳥などであったのか、初捉飼として小物の鳩、

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

** 前・中部大学国際関係学部人文系列

*** 前・中部大学非常勤講師

**** 吉田流鷹匠

鴨、棕鳥級のものであったのか、不明である。少し大物を捕らえたような場合は何らかの注記があるうが、それも見当たらないところに不満が残る。

今回扱うもう一つは鵠（ハイタカ）による実猟の物数帖であり（その四 本文、その五 解説）、大鷹を扱うのではない、珍しい記録なのである。鷹狩といえば大鷹が主体であり、その部位説明、訓育、調教、実猟、傷病、治療が『鷹書』の殆んどを占める。その中で隼や他の鷹が扱われるのはマイナーな部分で付加的であり、重要性の比重は落ちる。ここではわざわざ鵠が主体の資料を残しているわけであり、我が研究会でもこれをここで扱うことにした。

鵠（ハイタカ）は大鷹やツミと同じ類であつて、前者より小ぶりで後者より少し大きい、鳩ぐらいの大きさの鷹である。大鷹と比して、体そのものの小ささよりも、脚と趾のか細さが目立ち、その分貧弱に見える。固体間で大分違いがあり、わが国ではオスは小柄で、また上面の灰白色、胸の横斑の赤褐色が目立つところから別種の鷹と考えられ、コノリ（兄鵠）と呼ばれていた。コノリは大鷹の雄同様、性格が荒っぽく、気ままでぞんざいなため、鷹狩用としては不向きであつた。網掛けのものは使いものにならず、せいぜい巢鷹で捕らえたものが遣えるよう慎重に調教された。鵠の産地で名高いのは関東・中部地方で、特に飛騨、甲州は名鷹として知られた。本稿の「西腕」も飛騨の産である。また鷹狩に用いる鵠の期間は「三鳥屋」即ち「四歳」までと言うのが常識であつたが、この「西腕」は驚くなれ「八鳥屋」即ち「九歳」まで用いたということである。鵠は鷹に比して小規模なものである。したがって野先に出現

の際、何羽か一緒に遣われる（これは同時に鷹匠も複数であることを示している）。「西腕」の場合も、その個体の「物数帳」であるため明白ではないが、時折他の鵠の名「秋山」、「犬頭」、「大遠」なども見えるのは、同道している複数の鵠がいることを窺わせている。

本格的鷹狩りは冬季で大鷹で行なう。鷹狩といえば普通はこれを目指す。この「大鷹狩」に対して、その他の期間（半ば「鷹趣味」の間に合わせとして、遊びも兼ねて）行われる小規模な鷹狩が「小鷹狩」であり、この鵠がその代表である。同じ狩であつても「田」を当て、「田獵」といった。「田獵」が夏鷹の総称とすると、春口の狩は「披」の字を当て、また秋口の狩は「畋」の字を当て、これらをいずれもカリと読ませた。大鷹が鴨や鷺以上の雉、山鳥、雁、果ては鵠など大物取りに調育されるのにならして、鵠のほうは、獲物の主体が雲雀や鶉など殆んどが小鳥である。しかし鵠にとつては大物である鷺や鴨などには、大鷹の大物捕りと同様、特別な調教と他の獲物には向かわせない配慮がなされた。

鵠の調教は遅くとも一ヶ月ほどで仕上げてしまう。本稿の「西腕」も六月に巢鷹で捕らえられたものを七月五日に繋ぎ、十五日に狩り出している。スピード仕上げと言つて良い。「披」、即ち春から夏にかけて鵠の主体は雲雀であり、「畋」、即ち夏の後半から秋にかけての対象は鶉である。雲雀を対象とした鷹狩は「柴狩（シバカリ）」といった。柴狩にもちいられる鵠は、前年の秋冬で網掛けで捕らえられたもの、或いは鳥屋を重ねた二年もの以上の調教経験豊かな鵠の用いられるのが普通であつた。「西腕」のような春口や初夏で捕らえられたものは秋口から遣うのが常識であつた。尤も夏口に入る頃の雲雀の猟は一面ではやさしい面があり、新参者でも対応できる

ことは出来た。というのも雲雀は巢立つたばかりの若いものや、換羽期が来て、飛翔力が弱くなったものが狙われる。「趁雲雀（ねりひばり）」といって「毛をする」羽が落ちた」状態で、趁る様にしか飛べない雲雀は鵲が容易に狙える対象であった。この時期の雲雀の言い方として、換羽の雲雀が羽を落とし、様変わりして行くことを「ハクサビオトシ」というし、尾羽の半ば落ちたものを「半尾（ハシビ）」、半ば以上が明らかに落ちたものは「半尾過（ハシビスギ）」といった。尾羽が二枚だけで飛んでいるものもあり、これを特に「カリマタ」と言った。一方では尾羽を全く落とさない雲雀もあり、これを「ジンドウ」と言い、本稿一八〇一年七月十九日の項に記されている（40頁参照）。さらには換羽を上手に行ない、羽の抜けた様子を全く感じさせない雲雀もいた。「カラヒバリ」といった。恐らく「唐」から来た、「唐」のような驚異と賛嘆が混じった命名であったろう。雲雀の中でも特に狩るのが難しかったのであろう。本稿でもわざわざ「雲雀」の中の内訳として特記していることからそれがうかがえる（28頁には二ヶ所の記述あり）。換羽を感じさせない、また換羽後平常に復した雲雀の中には、飛翔もかわし方も上手で、天敵の鵲をもともしないものもいた。「ハイタカツキ」といって、鵲の襲撃に対して、それをなぶるように、もてあそぶように、羽をきかせて対処する雲雀のことをいう。狙われやすい河原にいる所から「カワラヒバリ」ともいった。

「敗」、即ち鵲の秋の獲物の主流は鵲であった。本稿の「西腕」の鵲の物数は少なく、鳴のほうが多い点注目される。地理的環境的条件なのか、数年の例外的なことなのか定かではない。秋口のこのころの鵲は「片鵲（カタウズラ）」といって、雄雌離れ離れに生息し

ており、警戒心がそれだけ削がれるため、獲物としては狙われ易かった。これに対して春の鵲は「諸鵲（モロウズラ）」といって、繁殖期を向かえ、雄は縄張りを主張し大声で鳴き叫ぶし、雌雄一緒で、警戒心が強く、狼はしにくい状況にあった。それでもこの「諸鵲」の時期、大鷹で狙わせることもあった。狙わせて鵲を何羽か狩ってそれを打ち止めとして、鳥屋入りさせるのである。これを「一草鵲（ヒトクサウズラ）」といった。鵲のほうでは、この頃には年初め、春季に入手したものも遣われ始める。本稿の「西腕」は先にも記したように、六月に巣雛としてもたらされ、七月五日には架に繋ぎ、十五日には「初促飼」に入っており、その調教のスピード振りには目を見張るものがあるが、同時に書き残した本人からの驚きぶりも伝わってこよう。鵲は飛び立つても高くは飛ばない。また長くは飛べない。そのため狩る方としては目線はより上から、高い方が良い。馬が利用できれば、見渡すことが出来、飛び立った鵲に瞬時の対応が出来た。また成功率も高い。馬に乗って鵲を手を据え、鵲に羽合わすことを「掛鵲（カケウズラ）」といった。また鵲が飛んでいて落下するように逃げて、草むらなどに隠れてしまうことも多い。どの辺りに落ちたか（これを「穴（アナ）」という）見定めておくことも鷹匠の大事な要件であった。この落ち所を見定めておくことを「草詰（クサツメ）」といった。こうした草叢や雑木の多い所では、鵲は穴を作られてばかりいると、失敗したことになる。冬ならともかく、草木生い茂る地面である。追い落とした場合、相手の鵲も茂みに隠れて最早それ以上は追えない。そこで犬の出番である。本来鵲御成のような格式の高い「鵲狼」ならば、勢子役の犬牽き、及び犬の同行がある。本稿では「物数帳」であるためか、その辺りの記

述は見られない。鶉の落ちた草詰の所めがけて犬を放つ。しかし犬を勢子代わりに、遣つても成功率はそう高いものでなく、逃げられたか行方知れずの場合も多々あり、いっこうに鶉が立たない場合も多い。これを「穴抜ける」と称している。こうした茂みに逃げ込む鶉に対して、秋になって鶉狩が絶好となる。なぜならば、草は枯れてくるし、また、稲の取り入れも終わり、谷地や田畑も見晴らし良くなる。鶉にとっては隠れる場が欲しい。一面の田畑の中で刈り残っているところに避難する。こうした刈り残った田にいる鶉のことを「刈詰（カリツメ）の鶉」といって、いよいよ進退窮まることになる。

さてこうして鶉で狩った獲物も、将軍が行なえば、大鷹のそれに準じて「御鷹（オントカ）の雲雀」「御鷹（オントカ）の鶉」となつて、大名への下賜品となつたし、また大名や武家の間でも狩猟の獲物はお互いに贈与品として分け与えあつた。そうした鷹狩の獲物の贈与に当たつて、獲物の個体の直接の贈与ではなく、余裕のある限り「鳥柴（トシバ）」と称して、柴ないしそれに類し、季節に合わせた枝に吊るしたり付けたりして贈る優雅な風があつた。柴も単に雑木の枝を是とせず、秋口の鶉は「萩」が良しとされたし、秋が深まるころは「菊」も良しとする。雲雀の場合、葦とか（図1参照）竹が好まれた。大鷹の獲物は鴨などの中物以上であつたため二羽または三羽に限定され、鳥柴に吊るされるのが普通であつた。鶉の方は対象が小鳥類であるために三羽以上、多くて七、十羽が、吊るされるのでなく、挟まれたのである。一羽のみは「犬はさみ」といって余り好まれなかつた。竹類や葦類は割って挟むのは容易であるが、萩や荻などはそれが難しいので二本を合わせその間を利用するよう按配した。「鶉一棹（ウズラヒトサヲ）」とは「鶉が十羽挟まれた鳥柴」

のことをいった。「鶉串（ウズラグシ）」という言い方もあつた。これを何棹か肩に担いで相手先に届けるのである。鶉と雲雀との異種と一緒に鳥柴とすることがあつた。これにも決まりがあり、季節を配慮するものであつた。荒井流によれば「秋冬は上り鶉とて上に上りさまに鶉（はさむ）也。雲雀はねりひばりとて鶉より下に、落雲雀とて下に鶉也。台につむことも如斯。春夏は下り鶉とて下に鶉也。同雲雀は上に鶉也。羽節を引合立て、頭を上に向けて鶉也。加様に鶉て人の方へ分する也。」（『續群書類従』所収『荒井流鷹書』四三九頁～四四〇頁）。また流派によつては、片羽を挟むか諸羽を挟むかによつて時期の相違を表



図2 鶉の鳥柴
『鷹絵図之書』児玉玄蕃著
(内閣文庫)より

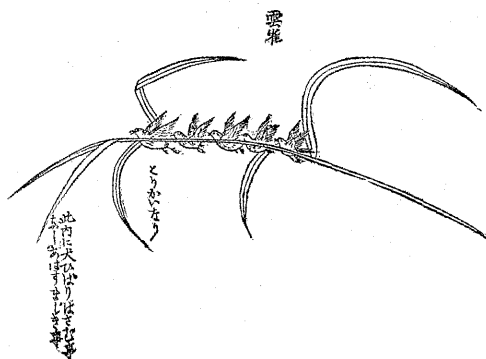


図1 雲雀の鳥柴
（『續群書類従』所収『齊藤朝倉両家鷹書』）より

わし、風趣を示すところもあった。

「鶉などは萩につけて人の方へやるなり」（『續群書類従』所収『鷹口伝』二九二頁）とある如く、鶉を代表とする小鳥「鷹の鳥」を貴人や目上の人、あるいは改まって人に贈呈するときは萩につける風が古くからあった。さらに『基成朝臣鷹狩記』にも「鶉は萩につける。鴨は萩なり」（『續群書類従』所収『基成朝臣鷹狩記』二八二頁）とあり、萩と萩の使用を明別している。また『青鷹似鳩拙抄』（『續群書類従』所収）には「萩に鶉を付事」としてかけ様を詳しく記している。

また同書三五二頁には、まず、「二本のあはひにはさむ也」とあり、萩の幹、二本を平行させてその間に鶉をはさむ旨を「すゑのほをばさらずしてそのままおくなり」と述べる。鳥柴は枝葉三つを残すのを正式としたのに準拠したのであろう。上の、葉や穂を切り離すことはせず、そのまま残す。この方が自然に合致するものであるし、また風情もあるうとの配慮からである。「もとの鶉よりした一尺五寸。切りやう竹のごとし」。鶉は小鳥なので何羽か一緒に掛ける。「もとの鶉」とは根元の方に挟まれた鶉の意味で、それより下一尺五寸、即ち45cmほどを残して切る。その切り様は竹を切るように切りなさい、とする。「かうみねりにても。又かずにてもゆふなり」。「かうみねり」は不詳。しかしながら後文の説明から「かみより（紙捻）」のことを言っているのであろう。鶉を萩に結いつける紐として紙捻か蔓を用いる。紙を細くよって強くしたもの。又はつる性の蔓を用いる。

さて本稿の内容との関連で、中東地域の関連事項を述べておく

う。鶉のことであるが、西アジアから北アフリカにかけては大きく二種のハイタカが生息する。アラビア語ではバーシヤク（*basraq*）複数形は *bawashiq*）と呼ばれる *Accipiter nisus* で、わが国のものと同種ではあるが、より短く丸い翼と長い尾をしている。これら二つの体的特徴が瞬時に方向転換を行なわしめているし、狭い場所や樹間を自由に飛び回らしめている。わが国のものより色が濃く目で体形もやや小振りである。もう一種はバーシヤクよりやや大きく脚と趾および嘴がしつかりとし、雄は頭頂部から青灰色がかつて、胸の細かい赤みがかつた横斑が綺麗なハイタカであつて、バイダク（*baydaq*）複数形は *bayadiq*）と呼ばれる *Accipiter badius*、または *Accipiter brevipes*、英名 *Levant Sparrow Hawk* である。後者はインド以西に分布し、より知られた名はヒンズー語かペルシヤ語から採られたシクラ（*Shikra*）であり、わが国では「タカサゴタカ」と命名されているものである。これらのハイタカ類は中東では古くからセーカー（*Saqi*）やベルグリン（*shahin*）、オオタカ（*baazi*）などと共に鷹狩として利用されていた。イスラムの時代になつても、存続した、と言うよりその鷹術は高まり深まつた。イスラム成立（七世紀初め）その初期から、血抜きをせずに可食とされるものとして、魚類と並んで狩猟の獲物が挙げられている。そしてその狩猟動物として『コーラン』注釈書や法学書の中でこのバーシヤクも並み居る鷹類の中に名を連ねているのである（詳しくは拙稿「狩猟の獲物とイスラムの食規定①・②」VESTA誌 第一九・二〇号、一九九四年五月、九月を参照されたい）。

ハイタカを用いての狩猟伝統は今では北アフリカのチュニジアで保たれている。特に盛んなのは地中海に突き出たボン岬の周辺で

あつて、カリビッツヤやフワーリツヤが中心である。ここではハイタカ獵が古くから行なわれており、ハイタカも標準語のバーシヤク *baashaq* と言わず、チュニジア方言名サーフ *saaf* と言っている。方名を持つ程にハイタカとの親密性が、この地方には存在したのである。ボン岬はヨーロッパとアフリカをつなぐ渡り鳥のルートに当たっている。春先(三月頃)ヨーロッパに戻っていくハイタカを捕らえて、二、三週間で調教を終え、三月下旬から五月末・六月上旬まで狩に遣い、遅くとも六月末には野に帰すのがこの風である。最近では事情が変わってきており、乱開発や人口増加、風車建設などの環境要因が大きく作用して、ハイタカの渡り、羽数も減少している。必然的にハイタカ獵自体も下火になったし、鷹匠となる人間も限られてきた。そこで政府や観光局の肝煎りで「ハイタカ祭り」 *mahajaan al saaf* を行い、この狩獵伝統保持と観光客誘致を図った。そして今では毎年の行事となっており、堀内が調査に出かけたのは二〇〇二年の二、三月であつたが(以下頁(8)、図3〜7までを参照)、聞いた所では前年の二〇〇一年で三五回を数えるに至っていると言う。とすれば一九六〇年代に始まっていることになる。例年六月下旬の三日間が当てられており、観光客誘致もあつてか、楽団や舞踊団の行なうチュニジアやボン岬地方のフォークソングやダンスの実演も組み込まれて、賑々しい *mahajaan* (年祭) になっている、とのことである。そして二日目、三日目の昼下がりから夕刻にかけて、ハイタカ獵レースが行なわれる。舞台は地中海に面したフワーリツヤのなだらかな崖で、絶景の見晴らしの場所である。高台の最上段に見物人席が設けられており、鷹匠たちは少し下のステージで獲物が投げ出される折にあわせてハイタカを放つ。鷹匠の放鳥振り、

タカの飛翔振り、獲物の捕り方、掛かった時間などが酌量されて判定を行なう。最近ではハイタカが減少したため、現地ではブルニー *bunni* と呼ばれているハヤブサ類(特定のハヤブサを指さず、セーカーやベルグリン、バルバリーなどの包括語)の参加、さらに外国の鷹匠の参加も演目の中に加えられ、湾岸諸国からの参加も増えているとのことである。

本稿との関連でもう一点ウズラのことを付言しておこう。中東世界でウズラといえば、先ず『旧約聖書』に登場するマナとウズラの奇蹟譚が頭に浮かぼう。モーゼがイスラエル人を率いて、隷属状態のエジプトから脱出して、シナイ半島及びシリア砂漠西部に留まり、やがて、約束の地、乳と蜜の流れる国を奪取してゆく物語の中に、である。砂漠に出たモーゼ一行にすぐに食糧難が襲う。そこで神は天から朝にマナを、夕にウズラを落とし、日毎の食とする。(『出エジプト記』16:13) マナはパンの代りとなり、ウズラは肉の役をなした。『民数記』第十一章三二〜三三節:「さて、主のもとから風が起こり、海の向こうからウズラを運んできてこれを宿営の近くに落とした。その落ちた範囲は、宿営の周囲で、こちら側も、おおよそ一日の行程、あちら側も、おおよそ一日の行程、地面から高さおおよそ二キューピトであつた。そこで民は立ち上つてその日は終日、その夜は終夜、またその次の日も終日、ウズラを集めたが集める事の最も少ない者も一〇ホメルほど集めた。彼らはみな、それを宿営の周囲に広げておいた」。一日行程はおおよそ四〇km、一キューピトはおおよそ四五cm、一ホメルはロバ(Hinnar)の一荷駄、おおよそ一五〇kgとして、宿営の周囲八〇kmにわたつて、積もり積もつて九〇cm、一人一人集めて少ない人でも一・五トンを集めたことにな

る。それを踏まえると、次の記述につながる。「神は彼らの上に肉をちりのように降らせ、翼ある鳥を海の砂のように降らせて、その宿営のなか、そのすまいのまわりに落とされた。こうして彼らは食べて、飽き足ることができた」（『詩篇』78:27-29）

ところで、この記述のようにものすごい数のウズラが人々の間に落ちたとして、科学的にどれほど実証できるのであろうか。最も首肯させる説は渡りをするウズラを捕らえたとするものである。ウズラには、我が国でもそうなのであるが、渡りをする種と留鳥のままの種がある。我が国には、寒期には暖地に南下し、暑期には寒地に北上するワタリウズラがいる。冬を関東以西の雪積のない暖かい地でおくり、夏に向かつては中部地方から北方の冷涼の地域にワタリを行い、そこで繁殖活動を行う習性を持つ。キジ科の中でも唯一のワタリを行うウズラ。その丸くずんどうな体から長距離飛行には無理がある。キジ科の重禽類は遠く飛んでも二、三百メートルである。こうしてワタリをしてゆくウズラのもっとも危険なのはワタリのルートに広い川や海が横たわっている箇所である。ただでさえ飛ぶのが遅く、長く続かないウズラは広い河や海の途中でへばって水中に落ちてしまうのかもしれない、暫く横切って陸に着いたとしても疲れ果て、落下するように着地する。そこを待ち構えていれば捕らえるのは容易である。

エジプトを脱出してシナイ半島に留まったモーゼ一行には半島の両端に横たわるスエズ湾とアカバ湾、それに南には両湾を支える紅海、北には地中海と、ワタリのルートに位置している場所が広がっていた。ウズラがドサッドサツと落ちてくるのも想像に難くない。ましてや、エジプトに限らずその周辺国はウズラの繁殖地として有

名であるし、ウズラの肉も卵の利用もされている。イラクの鳥類の代表はその数の多さからウズラとされているし、「一九二〇年以前にエジプト人だけで、国内消費のほかに毎年三百万羽にのぼるウズラを輸出していたのである」（R・ピーターソン『鳥類』ライフ大 自然シリーズ二四一頁）。とはいえ、限られた時期にのみワタリがあるのだ、四十年間、毎夕ということはありえない。ましてやオアシスや草原など草木・樹林地帯なら、身の安全と食の確保もできようが、何も植物とてない砂漠をウズラが渡りのルートとして選ぶか、となると疑問も多い。わが国のまさに「刈詰（カリツメ）の鶉」以上に悲惨なことになる。

イスラムの預言者ムハンマドもモーゼの「マナとウズラ」の一件は承知しており、次のように発言したと伝えられる、「もしイヴが存在しなかったら、女性がその夫に不忠とはならなかったであろう、それと同じようにイスラエル人たちがいなかったなら、（あのウズラのように）生肉が *yaxnazu*（腐って異臭を放つ）ようなことも無かつたであろうに！」（Damiri: Hayat al-Hayawan II 44）

この発言の背景には、毎日配給されると約束されたマナとウズラをイスラエル人たちは、規定量以上に集め蓄えようとした。そのために、神は翌日にはそうして溜め込んだマナを溶け失せさせてしまい食用とさせなかったし、又ウズラは腐らかして異臭を放させ、これも食用とはさせなかった。この故事以来、肉はすぐに腐るものとなった、とする理解がそこにあった。



図-4 ブルニーを据えるチュニジアの鷹匠 伝統帽チェチアを被る、伝統着ジェッパは着ていない

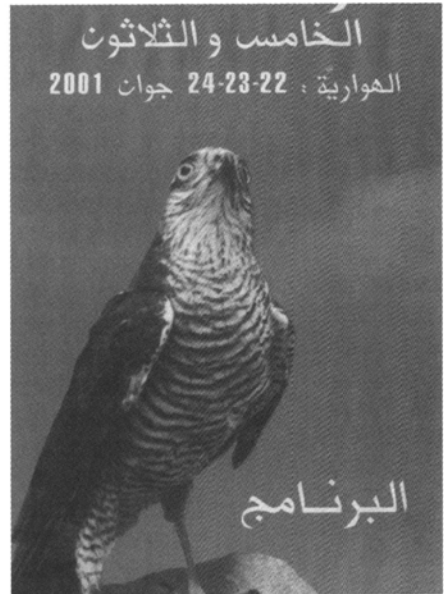


図-3 年祭のパフレットに載ったチュニジアのハイタカ サーフ



図-5 鷹狩レースの行なわれるナーディー(クラブ)入り口。きれいな白亜舎である。



図-7 地中海に向かって北東に傾斜するレース場 素晴らしい展望である。

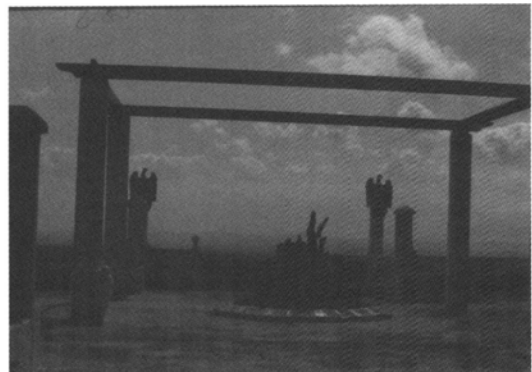


図-6 鷹狩レースの行なわれるメインスタンド。最上壇であり、骨組の上には伝統的民族豊かな覆い幕、垂れ幕が下がる。

その二 赤生物数覚帳 本文

本文Ⅰ（表紙）

① 山鷹中興^②戊年赤白也^④

⑤ 三帳ツツ六帳合巻

⑥ 赤生

物数覚帳

⑦ 三千石狩と在り

寛政二年

同翌夏迄

庚戌十一月より

「表オ

注（表紙）

本文最下段の「表」は表紙の、「オ」はオモテの略である。以下数字は頁数、「ウ」はウラの略である。

① 山鷹Ⅱサンオウ 雄鷹の名前。将棋の駒より由来。本将棋ではなく、大局将棋の駒。飛車・角の働き。但し斜め後方は二マスまで。成り駒になると角鷹（かくおお）になり、角の動きの制限がなくなる。山鷹、角鷹ともに鷹との縁語であり、角鷹の普通の読みは「くまたか」である。

② 中興 雌鷹の名前。

③ 戊年 いぬどし。

④ 赤白 赤生^{あかう}と同じ。注⑥参照。

⑤ 三帳ツツ六帳合巻 三帳ずつを大きな一冊として、それを二冊合わせて六帳の合巻とした。ここで紹介するのはその内の第一帳

である。

⑥ 赤生Ⅱアカウ 赤生とは胸に赤斑の残るまだ若い大鷹の呼称である。『放鷹』には「赤斑 アカフ。若鷹をいふ。鳥舎にかふ中に白くなる」とある（六二七頁）。赤白とも言う（本書一五丁裏にも）

⑦ 三千石 この場合は「三千石領」の意味で地名であって、諏訪からは塩尻を越えて松本へ下る入り口一帯で、中挾、熊井、内田、赤木、小池、白姫、和泉、神田一帯をいった。

⑧ 寛政二年 西暦一七九〇年。

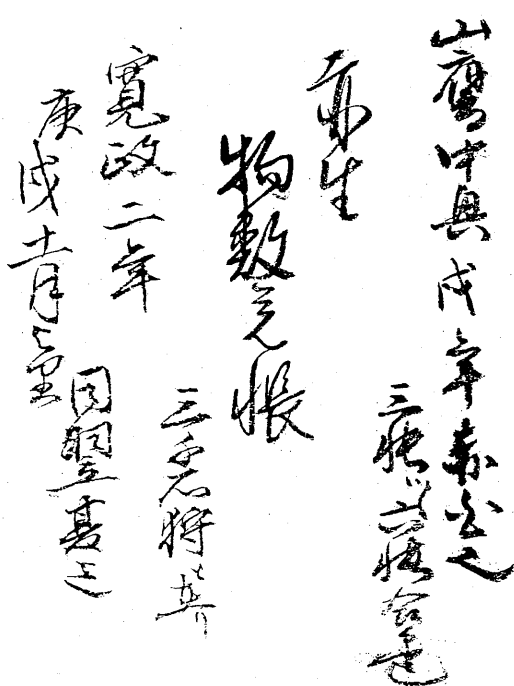


図8 表紙

本文2(十一月・十二月)

赤生物数覚

十一月二日

下諏訪止

取銅

一雄

東山田村

兵庫

小田野

同

三日

脇

一雄

三沢原

百助

小野峠下

二脇

一雄

同所

元右衛門

たこふ下

同

五日

三脇

一雌

高木村

左太夫

小屋郎沢

一同

大和村

鼎

柏立テ

一雌

大和村

元右衛門

柏立テ

一同

高木村

百助

姫久保

一雄

同村

惣右衛門

長久保

同

一雌

六日

左太夫

高木村

一同

大和村

百助

雨明ヶ沢

一同

同村

同人

柏立テ

一同

同村

元右衛門

山之神見立

同

九日

湯川村止

一雄

北大塩村

雄之助

吉田

一同

同村

鼎

一本木新田上

同

十日

槻木新田止

一雌

湯川村

百助

小さい脇

一雄

笹原新田

林右衛門

半どふ下

夕日当り^①

一雌

同所

左太夫

同

十一日

一雌

大角

金兵衛

朝日当り^②

雄之助「3ウ

一雌	大角	兵庫	一雄	東山田村	左太夫
	朝日当り			小田野	
一雄	同所	雄之助	十二月廿一日		弘沢泊
	とふ久保	左太夫	一雄	室内新田上	雄之助
一同	小角	金兵衛	一同	右同所	左太夫
	山崎久保	元右衛門	一同	中新田	鼎
同	十三日		一雌	観音久保	
一雄	大和村	源之進	一雌	弘沢	惣右衛門
	笹原			山道日向	
一雌	高木村	平内左衛門	同	廿二日	立沢泊
	小屋郎沢		一雌	中新田村	雄之助
同	十六日			下	
一雄	東山田村	惣右衛門	一雄	立沢橋道下	惣右衛門
	川久保		一同	立沢	左太夫
一雌	同村	雄之助		壺平	
	小田野		同	廿三日	乙事泊
一同	右同所	左太夫	一雄	稗之庭	雄之助
一同	右同所	鼎	同	廿四日	中新田止
同	十八日		一雌	瀬沢新田	雄之助
一雄	東山田村	百助		ハフテ	
	小田野		同	廿八日	
一雌	右同所	雄之助	一雌	下桑原村	源之進
一同	右同所	源之進		武津北ノ平	
一雌	右同所	百助	一雌	下桑原村	繁治

一 雌	赤羽山	百助
一 雌	同村	
一 雌	こ屋沢脇	
一 雌	同村	
一 雌	同所	兵庫
一 雌	岡谷三沢間	源之進
	道上	
十二月廿一日		「7ウ
一 雌	角間新田	惣右衛門
一 雌	やとくら	
一 雌	同所	左太夫
一 雄	くるみ久保	
一 雄	同所	半蔵
一 雄	荒井	
一 雄	同 廿二日	
一 雄	こふの洞	元右衛門
一 雄	同所	惣右衛門
一 雌	笹原	
一 雌	同 廿五日	
一 雌	富部	雄之助
一 雌	若宮	
一 雌	同所	左太夫
一 雌	高木	

「8オ

一 雌	小久保	半蔵
一 雌	同 廿六日	
一 雌	東山田村	
一 雌	ぶくでん	百助
一 雄	下之原村	
一 雄	山吹沢	林右衛門
一 雄	湯田	
	大久保	雄之助
	「8ウ	
十二月 中		
メ三拾羽	内雄十三	
雌十七		
都合 七拾七羽	内雄三拾三羽	
雌四拾四羽		
注(十一月・十二月)		
① 夕日当りユウヒアタリ	鷹に疲れが見えたりした時、(狐を	
② 朝日当りアサヒアタリ	朝日に当て日光浴させること。	
③ くり掛ケ	不明。捉(狩)らせ方か。	
本文3 (一月・二月)		
正月三日		
一 雌	大熊村	半蔵
一 雌	縁右衛門裏	
一 同	右同所	百助

同	同村	藥師堂上	左太夫	同	九日	やと倉久保	惣右衛門
同	南真志野村			一雄	高木村		
雄	善光寺上	雄之助	「9才	一雌	小屋郎沢入朝		惣右衛門
	同村				同村		
	長左衛門裏	惣右衛門		一雌	長久保	兵庫	「10才
同	五日				同村	金兵衛	
雌	大和村	惣右衛門		一雌	長久保狐林間おね	雄之助	
	柿之木畑				右同所		
同	右同所	鼎		一雄	高木村	鼎	
雄	高木村			一雄	狐林桐久保間おね		
	姫久保	半蔵			同村		
同	同村	百助		一雄	桐久保柏林間	百助	
同	同村				同村		
	小屋郎沢入				石提場上	兵庫	
同	同村	林右衛門	「9ウ	一雌	右同所	金兵衛	
	小屋郎沢			同	十三日		
雄	角間新田			一雌	角間新田	百助	
	かわこ石	百助			鎌倉久保		「10ウ
雄	同所	惣右衛門		一雌	角間新田	鼎	
	洞鉄久保				かり掟久保		
雌	同所			一雌	同新田	惣右衛門	
	鎌倉久保	百助			若狭久保		
雌	同所			一雄	下桑原村	左太夫	

雌	模原村	平内左衛門	二月十五日	雌	大和村	百助
一	北丸山			雌	小屋郎沢	
雌	同村	左太夫		雌	高木村	
雌	西越山			雌	桐久保	鼎
雌	同所	元右衛門		雄	右同所	百助
雄	田中	雄之助		同	十八日	間下止
雄	和泉村			雄	三沢村上	雄之助
雌	大林	「13才		雌	右同所	源之進
雌	模原村	鼎		雌	三沢村	百助
雌	田中			雌	右同所	左太夫
同	四日	北熊井村泊		雄	右同所	三左衛門
雄	北熊井村	万五郎		雌	三沢小野峠下 ^②	供廻
相捉	壹本杉脇			同	十九日 昼まへ	鼎
二月九日	武津	惣右衛門		雌	岡谷村	
雌	百々ね上			雌	赤羽脇山	
同	十日	源之進		雌	岡谷村	三左衛門
雌	大熊村			雌	赤羽脇山脇	
雌	縁右衛門裏			雌	右同所	半蔵
雄	同村	雄之助		雌	岡谷村	兵庫
雌	大日向	「13ウ		雌	二月廿一日	
雌	南真志野村	浅蔵		雌	赤羽	
雌	福松上			雌	岡谷村	

一 雌	同所	雄之助	
一 雌	小遍津	源之進	
脇			
一 雄	三沢村	みなと	15才
古寺			
二月廿五日			
一 雄	東山田村	百助	
小田野			
一 雄	右同所	林右衛門	
二月中			
メ三十三羽	内雄十		
雌廿三			
都合百四十九羽	内雄五十八		
雌九十一			
注（二月・二月）			
① 九勞し「クロウシ 苦勞し。			
② この部分の下に鷹匠名が抜けている。			
本文4 （三月）			
三月朔日 笹原新田止			
一 雄	槻木新田	惣右衛門	
壺の羽			
一 雌	笹原新田	浅蔵	
半桐夕日当			
			15ウ

一 雄 梶木新田 惣右衛門
 一 雌 小遍津 源之進
 脇
 一 雄 三沢村 みなと
 古寺
 二月廿五日
 一 雄 東山田村 百助
 小田野
 一 雄 右同所 林右衛門
 二月中
 メ三十三羽 内雄十
 雌廿三
 都合百四十九羽 内雄五十八
 雌九十一
 注（二月・二月）
 ① 九勞し「クロウシ 苦勞し。
 ② この部分の下に鷹匠名が抜けている。
 本文4 （三月）
 三月朔日 笹原新田止
 一 雄 槻木新田 惣右衛門
 壺の羽
 一 雌 笹原新田 浅蔵
 半桐夕日当

図9 原書 十五頁オモテ・ウラ

惣メ
 百五拾壹羽
 内 雄 五十九
 雌 九十式
 赤白二居物数メ
 式百十壹
 16才

その三 赤生物数覚帳 解説

赤生物数覚帳は「山鷹中興戊辰赤白也」とある如く赤斑の優れたオオタカ、山鷹(雄)・中興(雌)の五鳥屋六歳までの物数の記録であり、本稿で扱ったのはその六分冊(三帳ツツ六帳合巻)の内の第一分冊である。その記述は以下のように纏められる…

月名	物数数	出獵回数
11月 2～29日まで (4ウまで)	雄20羽 雌27羽 惣メ47羽	16回(内1泊2日1回 2泊3日1回)
12月 1～26日まで (7オまで)	雄13羽 雌17羽 惣メ30羽 雄33話 雌44羽 惣メ77羽	10回(内1泊2日1回)
正月 3～31日まで (11オまで)	雄15羽 雌24羽 惣メ39羽 雄48羽 雌68羽 惣メ116羽	11回(内1泊2日1回、 6泊7日1回、 2月に続く)
2月 1～25日まで (14オまで)	雄10羽 雌23羽 惣メ33羽 雄58羽 雌91羽 惣メ149羽	11回(内1泊2日1回、 6泊7日1回、 1月末に続く)
3月 1日のみ (14ウまで)	雄59羽 雌92羽 惣メ151羽 雄117羽 雌183羽 惣メ210羽	1回(但し1日以降の 記述なし)

鷹匠名…

1 鼎

11月5日、9～11日(連泊)、16日、21～24日(4泊)

1月5日、9日、29～2月4日(6泊7日、2月始めに続く)、

2月15日、18～19日(泊り)、

11月2～3日(泊り)、5日、6日、

1月29～2月4日(6泊7日、2月始めに続く)、

11月9～11日(連泊)、

1月9日、

11月13日、18日、28日、29日、

1月18～19日(泊り)、

2月10日、18～19日(泊り)、22日、

11月5日、6日、9～11日(連泊)、16日、18日、

21～24日(4泊)、29日、

12月18～19日(泊り)、21日、25日、

1月3日、13日、15日、18～19日(泊り)、29

2月4日(6泊7日、2月始めに続く)、

2月18～19日(泊り)、

11月29日、

2月18～19日(泊り)、18～19日(泊り)、

11月5日、16日、21～24日(4泊)、

12月3日、14日、15日、21日、22日、

1月5日、6日、9日、13日、

14 百助	13 湊	12 万五郎	11 平内左衛門	10 兵庫	9 半蔵	8 繁治
; 11月2~3日（泊り）、5日、6日、18日、 12月3日、14日、18~19日（泊り）、26日、	; 12月1日、 2月22日、	; 1月、29~2月4日（6泊7日、2月始めに続 く）、	; 11月13日、 1月、29~2月4日（6泊7日、2月始めに続 く）、	; 11月2~3日（泊り）、9~11日（連泊）、 12月18~19日（泊り）、 1月9日、 2月15日、22日、	; 12月14日、15日、21日、25日、 1月3日、5日、15日、18~19日（泊り）、29 ~2月4日（6泊7日、2月始めに続く）、 2月10日（浅蔵）、18~19日（泊り）、 3月1日（浅蔵） 2月10日、3月1日に浅蔵とあるが、状況から 推して半蔵の誤記であろう。	; 11月28日、 3月1日、 2月9日、
内田村 大角	和泉村 荒井	地名…（以下頁②の図10を参照） あ 赤木村 1~29（泊まり）、	16 林右衛門 ; 11月9~11日（連泊）、 12月1日、15日、18~19日（泊り）、26日、 1月5日、 2月25日、	15 雄之助 ; 11月9~11日（連泊）、18日、21~24日（4泊）、 29日、 12月3日、18~19日（泊り）、25日、26日、 1月3日、9日、22日、29~2月4日（6泊7 日、2月始めに続く）、 2月10日、18~19日（泊り）、22日、	この百助の姓は吉田であり、ハイタカの調教に かけても巧みであったことが判明。23頁注⑤を 参照。 ; 12月3日、14日、22日、 2月15日、18~19日（泊り）、25日、 1月3日、5日、6日、9日、13日、18~19日 （泊り）、22日、	

大熊村	2 : 10、	ま	横原村	2 : 3 (泊まり)、	
大塩村	11 : 9、		真志野	1 : 3、2 : 10、	
岡谷	12 : 18、19、2 : 19、22、		間下	2 : 18 (泊まり)、	
乙事	11 : 23 (泊まり)、		三沢(原)	11 : 3、12 : 18、2 : 18 (泊まり)、22	
か	角間新田		や	山田村	11 : 2 (泊まり)、16 18、12 : 3、26、1 : 18、19
神田村	2 : 1 (泊まり)、		大和村	11 : 5、13、29、12 : 15、1 : 5、2 : 15、	
旱之庭	11 : 23、		湯川村	11 : 9 (泊まり)、	
久保	12 : 14、		湯田	12 : 26、	
熊井村	2 : 4 (泊まり)、	わ	和田山村	2 : 2 (泊まり)、	
桑原村	11 : 28、12 : 14、1 : 13、1 : 22、				
小池村	1 : 29 (泊まり)、				
小角	11 : 11、				
さ	笹原新田				
下諏訪	11 : 10 (泊まり)、3 : 1 (泊まり)、				
下之原	11 : 2 (泊まり)、1 : 18 (泊まり)、				
瀬沢新田	12 : 26、				
た	高木村				
高木村	11 : 5、13、29、12 : 1、3、15、25、1 : 5、9、				
武津	15、2 : 15、				
立沢	2 : 9、				
槻木新田	11 : 22 (泊まり)、				
富部	11 : 9 (泊まり)、3 : 1 (泊まり)、				
な	12 : 3、26、				
中新田	11 : 21 (泊まり)、22、24 (泊まり)、				
は	11 : 21 (泊まり)、				

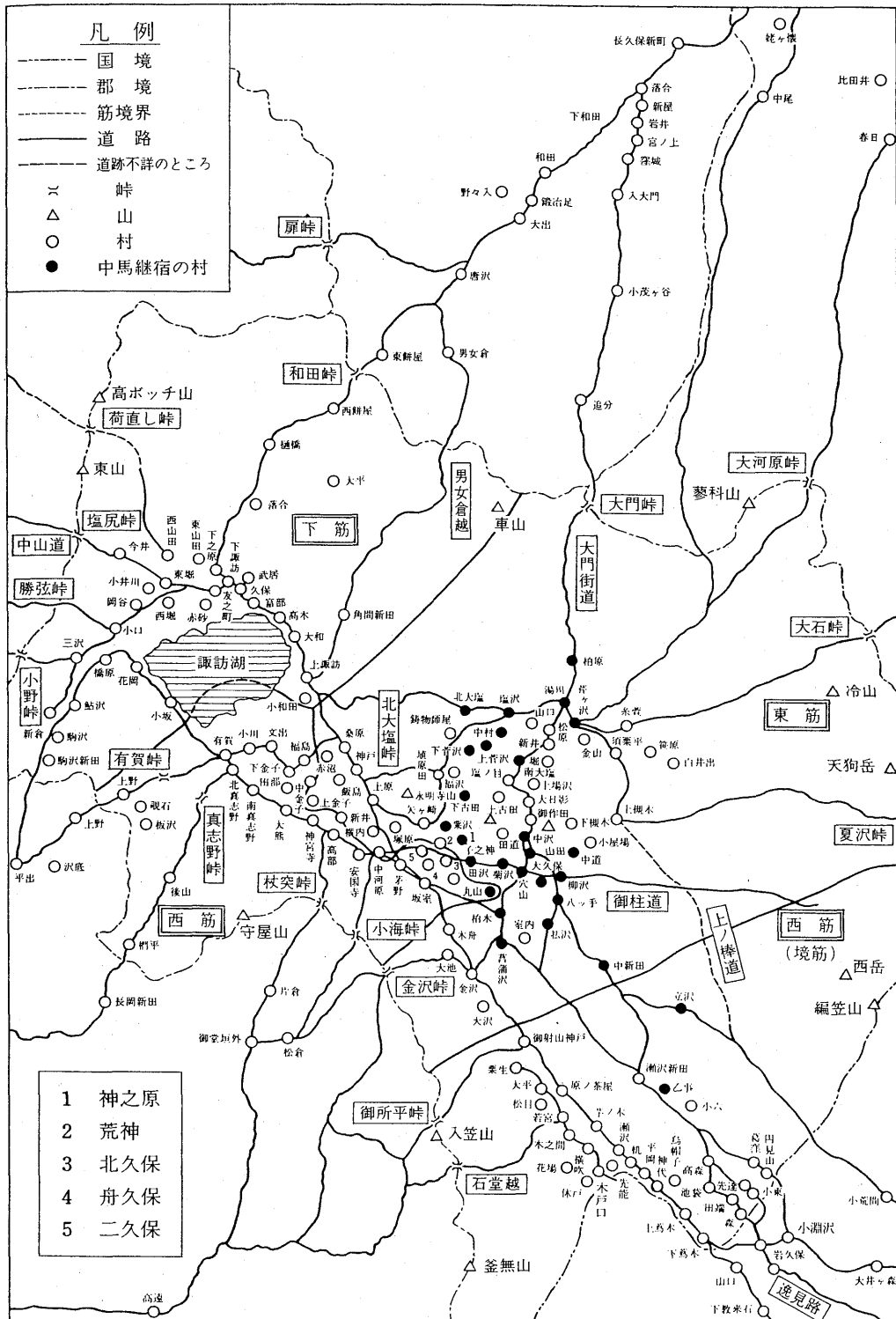


図10 本稿と関連する参考地図(『諏訪市史』中巻652頁、昭和63年3月諏訪市役所発行)

その四 飛驒 西腕巢鷓物数潮 本文

本文1 (表紙)

寛政十一己未年産立^{①②}

飛驒

西腕巢鷓物数潮^{③④⑤⑥}

文化三丙寅年迄同四卯於時^{⑦⑧⑨}

出ノ上巢山工還^{⑩⑪}

八時九才也^⑫

「表紙

注 (表紙)

① 己未ニツチノト ヒツジ 十千十二支で年を呼称する言い方。
寛政十一己未年は一七九九年。

② 産立ニウブタチ 雛から育て上げる。

③ 西腕ニセイワン 鷓 (ハイタカ) に付けられた名。諏訪から見
て飛驒は西に当る。剛腕のハイタカになることを願つての命名か。

④ 巢鷓ニスダカ 巢から幼鳥のうちに捕獲してきた鷓 (ハシタカ・
ハイタカ)。網掛の対。ハイタカは鷹の中では小型であるが、冬
期のオオタカ (大鷹) に代わって、それ以外の時期の鷹狩りによ
く使われる。解説参照。

⑤ 物数ニモノカズ ここでは捕獲鳥の種類とその数。

⑥ 潮ニチヨウ 帳の音通。帳面。ノート。

⑦ 丙寅ニヒノエトラ 文化三丙寅年は一八〇六年。

⑧ 同四卯 文化四年丁卯年。文化三年まで鷹狩りに遣つて、その

翌年。

⑨ 時出ニトヤダシ 換毛を終えさせ鳥屋から出す。

⑩ 巢山ニスヤマ 幼鳥の時に捕つてきた巢のある山。

⑪ 八時ニヤトヤ 八回換毛した。九年目。鳥の年齢の数え方で九
才。鷹狩りのハイタカを遣うのはせいぜい三十四年で、これほど
長期に遣うのは珍しい。管理がよほど行き届いたのであろう。

訳 (表紙)

寛政十一年 (一七九九) に生まれた。

飛驒巢で捕った巢鷓

西腕の捕獲記録帳

文化三年 (一八〇六) まで遣った。文化四年 (一八〇七) 時出し
の後、巢山へ返す。八時を経て九才の時である。

寛政十一己未年産立

飛驒

西腕巢鷓物数潮

文化三丙寅年迄

同四卯於時
出ノ上巢山工還
八時九才也

図11 原文表紙

本文2（前書き）

飛驒巢

西腕物数

己未年六月飛驒之

小平治持参。江戸留守故

井手司光ニテ産立候。

地白梯符大振顔先

肩小頸前後鷹容

無残所腰前強大捉手

大幅釣合勝テ上品成

形チ也。七月五日繫、吉田

百助据立。蚊帳中ヨリ

羽振勝、繫之上くるい

至テ羽輕ニテ、馴付能ク

渡も始メヨリよろしく、勝

テ大心ニテ鶏あひる杯何

によらずほしかり候。肉

当りかね候故、手放し之

日合延、同く十五日

初テ手放しいたす。

注（前書き）

① 飛驒巢ニヒダス 全国各地に名巢（メイス）と呼ばれる鷹の産

出地があり、飛驒もその一である。

② 江戸留守ニエドルス 江戸詰めで留守をしていた。主語が領主か鷹匠頭かはつきりしないが、この物数帳を記した鷹匠頭であろう。

③ 梯符ニハシゴフ 尾羽の符の一。

④ 繫ニツナギ 鳥屋から出し架（ホコ）に繋いで。

⑤ 吉田百助 このハイタカを遣った鷹匠のうち、中心的人物。諏訪藩に仕えた吉田流の鷹匠か。「赤生物数覚帳」の方にも最も多く登場する。19頁、鷹匠名14を参照。

⑥ 据立ニスエタツ 鷹を拳に据え屋外を連れ回して慣れさせる。野据えなど。

⑦ 蚊帳ニ夏に蚊を防ぐため吊り下げて寢床を覆うもの。ここでは幼鳥を外敵から守るために蚊帳を屋外に仕立て、その中に新鮮な柏葉などを敷き詰め、地架（ジボコ 高さの低い架）・臥籠（フセゴ）などを置いて飼育する蚊帳。『鷹書（大）』第七分冊図2参照。

⑧ 肉当りかねニシシアタリかね 手で触診してみるとハイタカの筋肉がまだ出来ていない。

⑨ 手放し之日ニテバナシノヒ 獲物に羽合せする日。初狩の日。

訳（前書き）

飛驒巢

西腕の物数

己未年（一七九九年）六月、飛驒の小平治が持参した。江戸へ出かけて留守をしていたので、井出司光の所で巢立ちまでの飼育をした。このハイタカは地が白く梯符で大振りである。顔先・肩・小頸・

胴の前後とハイタカの姿は残るところなく全て立派である。腰は強大でがつしりと座っており、捉手は大幅で釣合いが優れて上品な形である。七月五日に架に繋ぎ、吉田百助が据え立てた。蚊帳の内に居るうちから、羽振りが勝っており、繋いである架の上を動きまわり、羽軽で鷹匠に対する馴れ付きも良く、手から手への渡りも初めから良く、優れて太心でこせこせせず、鶏・アヒルなど何でも欲しがり食欲がある。筋肉がまだ出来ていないので、放鷹の日を延ばし、七月十五日に初めて獲物を捕らせた。

本文3 (七月十五日～二十日)

七月十五日	下筋 ^①
一 初捉飼 ^② おけら ^③	百助
同十六日	同所
一 脇 ^④ ひはり ^⑤	同人
同十八日	柏木新田泊 ^⑦
一 二脇 ひはり	同人
同十九日	中新田泊
一 鷗 ^⑥ 三	同人
夕捉飼共	
同廿日	御射山神戸泊
一 鷗 ^⑥ 八	同人
夕捉飼共	

「2才

注(七月十五日～二十日)

① 下筋Ⅱシモスジ 信濃国諏訪郡は下筋・東筋・西筋の三地区に分かれ、下筋は下諏訪と上諏訪にはさまれた諏訪湖近辺。諏訪湖の霧が峰側の地域である。まずは近場で羽合せたわけである。以下、地名については図10参照。

② 初捉飼Ⅱハツトリカイ 初めて餌をさせ、捕ったこと、また捕らえたものを食べさせる。初寄り(ハツヨリ)とも。

③ おけら 啄木鳥(キツツキ)の別称。

④ 脇Ⅱワキ 「新鷹の始めて狩りに出で第二回目に取りたるをいふ。」(放 七〇一頁)。三番目に取った獲物を二脇、またはダイサンという。

⑤ ひはりⅡヒバリ ここでは、ひはり・鷗・雲雀と三様の文字で記されている。

⑥ 初登りⅡハツノボリ 初めて山に登り、本格的な狩りをさせる。
はつとがり
初鳥狩とも。

⑦ 泊Ⅱトマリ 宿泊。十八日の柏木新田泊まりに始まり、翌十九日は中新田、二十日は御射山神戸、二十一日は金沢と泊まり、二十二日に帰っている。五日間にわたる茅野の東方への遠出・初登りである。ここまで調教にあたった百助一人が西腕(ハイタカ)を遣っている。

本文4 (七月二十一日～八月二十四日)

七月廿一日	金沢泊
一 鷗 ^⑥ 七	同人

八月六日 帰	一 鳴 ^⑥ 一	一 鷗 ^⑤ 一	一 鷗 ^⑤ 廿	同五日	一同 廿二	同 四日	一同 廿	同三日	一 鷗 五	八月二日 野入七ッ比 ^④	一同 一	同廿九日 水浴ニ参 ^③	一同 五	同廿六日	一 鷗 九	同廿四日	一 鷗 五	同廿二日 帰 ^①
	同人	同人	乙事泊	同人	立沢泊	中新田泊	百助	取飼	半蔵	上ノ平	惣右衛門	下筋	同人	下筋	右同 ^②	同人	夕提飼共	

「3オ

「2ウ

一 鷗 十一	同九日	一 鷗 九	同十三日	一 鷗 十一	一 鷗 一	同十四日	一 鷗 十二	一 鷗 二	同月十九日	同廿一日	一同 三	同廿二日	一 頼丹 ^⑥ 二	同廿三日	一 鷗 一	同廿四日	一 鷗 一
百助	下筋	同人	弘沢泊	惣右衛門 ^⑦	左太夫	笹原新田泊	惣右衛門	左太夫	勝弦	百助	峠脇より横手	惣右衛門	上之筋	横内下	同人	勝弦	左太夫

「3ウ

「4オ

注（七月二十一日～八月二十四日）

① 帰カエル この日（七月二十二日）の猟を終えて帰宅。五日間の遠出はここで終了である。夏猟の最長泊は十一泊十二日であ

る(33頁、注⑫を参照)。真冬の大鷹狩では六泊七日が正月中、及び正月から二月にかけて二度行われている。(18頁参照)。

② 右同「ミギニオナジ」「夕捉飼共」と同じ。獵の終りに鷹にも「苦勞様」と捕った獲物をその場で食べさせてやったのである。

③ 水浴ニ参取飼 ハイタカ(西腕)を水浴させるために屋外へ連れ出し、そこで狩らせて餌飼いをしたのである。

④ 野入七ツ比「ノイリナツコ」野に入ったのは午前四時頃。「野入り」は「山登り」に對、狩りの旅の始まりである。ここまでは払沢・中新田・立沢・乙事と四泊して八月六日の獵を終えて帰っている。「七ツ比」は午前四時頃であるから、初秋の七月下旬はまだ暁前の暗い時刻である。

⑤ 児鶉「コウズラ」鶉の子供。鶉は秋の鳥であるが、初秋で未だ十分成長していなかったであろう。

⑥ 鳴「シギ」未だ大きな鳴(20cm以上)を狙うのは無理であろうから、ヒバリシギ(全長16cm)か、トウネン(全長15cm)・ミユビシギ(全長19cm)当りであろう。いずれは「山鳴(全長35cm)」を捕らえよう。山鳴は美味で獵師仲間では「山鳥三羽より山鳴一羽」と言われる。茄子料理に「鳴焼き」があるが、鳴の焼き鳥のように美味しい茄子料理の意である。

⑦ 惣右衛門 左太夫 共に鷹匠であるが、十三、十四の二日間二人で西腕を遣って狩りをしたものと思われ、原本の両名の上には薄く山カッコが付されている。この両名も「赤生物数覚帳」に頻繁に登場する(18頁参照)。以下八月二十六日、九月三日・四日も二名で狩りに出ている。多分、鷹も西腕のみでなく小鷹なの

で複数羽連れ歩いているのである。

⑧ 頼丹「ホホアカ」頼が赤い鳥。ベニマシコ・ウソなどか。

本文5(八月二十六日～九月四日)

八月廿六日

笹原泊翌日^①

朝帰

一 鳴 二

百助^②

一 鶉 四

惣右衛門

九月三日

八手新田泊

一 鳴 一

一 鶉 三

左太夫

一 頼丹一

孫太郎

一 雉子児二大^③

同四日

帰

一 鳴 二

前の^④

「4ウ

一 鶉 二

兩人

注(八月二十六日～九月四日)

① 翌日朝帰「ヨクジツアサガエリ」その日の獵を終えて夕方帰っているのが通常であるが、此処だけが翌日の朝となっている。特別の用事が出来たか、前泊地と距離的に少し離れているので道中を氣遣ったものか。

② 百助 惣右衛門 こも二人で鷹を遣っている。百助は師匠格である。連名の書き方に上下関係があるとすれば、百助―惣右衛

門―左太夫―孫太郎となる。また、その日に主に鷹を遣った者を先に書いたのかもしれない。なお孫太郎は「赤生」の方には登場しない。若手か。

③ 大ダイ 捕った雉の子が大きいとメモしている。来年、再来年のための大切な資料になる。

④ 前の兩人 袋綴じの綴じ目で見にくい、前日と同様の左太夫・孫太郎である。

本文6（九月十八日）

同月十八日 犬頭^① 角間新田芦ノ沢

一 鶉^② 一 百助

右切飼^③

一体至極本気で

ものおち一向に無し大杯

始より少と^④かめ不申勝て

羽飛掛羽別テ勝たる

手際也

注（九月十八日）

「5才

① 犬頭Ⅱイヌガシラ 鷹の名前である。西腕と併せ、犬頭という名のハイタカも仕上ようとしていたようである。角間新田は下筋にあり近場である。ここで百助が鶉を取らせて犬頭の仕上がりようを見たようである。この日のメモは「西腕物数帳」の中にあって挿入部と言える。以後、この犬頭は時々登場する。

② 切飼Ⅱキリカイ 切って餌として与える。捕った鶉を鷹に自由に取飼いさせるのでなく、鷹匠が切り刻んで飼ったのである。

③ 一体Ⅱイッタイ だいたい。およそ。

④ とかめⅡトガメ 咎め。気にする。

⑤ 羽飛Ⅱハトビ 羽の飛びよう。飛び方。

⑥ 掛羽Ⅱカケバ 獲物を掛け抑える羽。

⑦ 別テⅡベツシテ 格別に。特別に。

訳（九月十八日）

同じ月の十八日、犬頭を遣つてみる。角間新田芦ノ沢にて。鶉を

一羽捕獲。百助。

捕った鶉を切り刻んで、餌飼いした。

だいたい、この犬頭は至極本気で物怖じを一向にしない。犬などを初めから少しも気にしない。他に勝つて飛び方も獲物に打ち掛ける羽の動きも、特別に素晴らしい手際である。

本文7（年度メ総物数）

総物数^①

百八十二

内

鶉 百五十九

鳴 十六

鶉 二

類丹 三

おけら 一

雉子児 一

以上

「5ウ

注(年度メ総物数)

① この年の物数一位は雲雀、二位が鳴である。雲雀は春の鳥、鳴や鶉は秋の鳥である。西腕は春に生れた巢鷹で秋(七月)からの捕獲数である。またハイタカは大鷹と比べ体が小振りであり、大型鳥の捕獲はしない。鳴も種類が不明であるが、小型の類であつたろう。

本文8(一八〇〇年三月二十二日～六月二十八日)

去未年産立飛驒巢

庚申 西腕物数

三月廿二日 文出脇

一 からひはり 一

甚八

四月五日

一 鶉 一

横手

佐太夫

一 鶉 六

蛇屈原

内 三 からひはり

三 児ひはり

五月七日

一 鶉 一

齊之助

「6才

池ノ平^⑦

一 同 一

与市

乗揚ヶ^⑧

同月廿三日

一 鶉 一

乗上ヶ^⑨

一 同 一

池ノ平

茂右衛門

一 同 一

同

一 同 一

同

六月四日

一 鶉 壹 野田^⑩

学之進

同 五日

一 鳴 三 内宅雛

一 雛鳥式

一 雛雛二

一 赤くゐな^⑪メ八ッ勝弦永井坂^⑫

同十日

一 鶉 壹

一 鳴 式

学之進

同廿六日 土用明十日メほど也。雛鶺^⑮
余ほど鳴未少し早メ

一 鶺 四

蛇屈原 学之進

一 鶺 四

同廿八日

一 鳴 壺

下筋 学之進

一 鶺 六

「8才

注(一八〇〇年三月二十二日~六月二十八日)

① 去年ニサルヒツジドシ 去年の未年(一七九九年)

② 庚申ニカノエサル ここでは一八〇〇年。

③ 文出脇ニフミデワキ 文出(地名)の傍。文出は諏訪湖の南。

割合近場である。

④ からひはり 唐雲雀。換羽を上手にやってのけ立派な体格をした雲雀。「趁(ねり)雲雀」の対。(3)頁の解説参照。

⑤ 横手 地名。六月十日の記事によれば野田に続く。

⑥ 蛇屈原 地名。

⑦ 池ノ平 地名。

⑧ 乗揚ケノリアゲ 地名。

⑨ 乗上ケ 表記は異なるが⑦の乗揚ケに同じ。

⑩ 「一同 一 池ノ平」此の記述「一同 三 池ノ平」と書かれるべきであろう。茂右衛門が池ノ平で鶺を三羽捕ったのである。

三行に分けて書かれているのは不審。あるいは五月二十三日以降、六月四日までの何れの日か失念したためか。

⑪ 野田 地名。

⑫ 同五日 六月五日。新暦ならば七月、夏の盛りであるが、まだ雛が目立つ。鳴は三羽のうち一羽、雲雀・雉はそれぞれ二羽のうち全てが雛である。しかし、その日の計は八羽で獵らしくなってきた。本格的な獵期まで後一息というところである。

⑬ 赤くぬなニアカクイナ 緋水鶺(ヒクイナ)。ツル目クイナ科の鳥。夏鳥。

⑭ 勝弦永井坂 地名。勝弦峠の永井坂。勝弦峠は塩尻峠の南隣。

⑮ 内ニウチ 三羽捕った雲雀の内訳である。この三羽は共に成鳥であるが、親子であったか一羽は古羽を四枚持ち、その年生れの二羽は新しい羽が四枚生えていた。換羽への注視が記されている。

⑯ 春子ニハルコ その年の春に生れた鳥。

⑰ 追羽無甲斐ニオイバネカイナシ 追羽の羽振りが情けない。当日の西腕の様子を述べている。筋肉の張りは良いが、獲物を追う時の羽振りが悪いのである。

⑱ 今日も 西腕の様子は昨日同様今日も。

⑲ 弱き方ニヨワキホウ 獲物を追う羽振りがどちらかというと力強さが感じられないのである。雲雀九羽捕らえても、まだ少し弱いというので分かるように、雲雀や鶺は一日十数羽捕らえるのが普通と見てよい。

⑳ 土用明ニドヨウアケ 夏の土用は立秋前の十八日。ここは土用が明けて十日目であるから立秋の一週間ほど前。最も暑い時期で

ある。

②① 少し早メⅡ獵期には少し早目。「雛鳥の鳴き声が余程聞こえるようになつてきたが」と鶉の鳴き声に耳を澄ませて獵期を確かめている。秋期のメインは「鶉狩り」となる背景がある。

本文9（七月三日～八月五日）

七月三日八時より野入払沢泊

一 鶉 九

原山

学之進

一 雉児壺

同 四日 瀬沢泊

一 鶉 九

学之進

同 五日 金沢泊

一 鶉 十五

学之進

同 六日 帰

一 鶉 六

一 雉児式

学之進

同 十日 下筋

一 鶉 四

学之進

一 河原鳴 一

「 8ウ

同月十三日 下筋

一 鶉 四

学之進

同月十六日 手長上^③

一 鶉 式

学之進

同月十八日 山田新田泊

一 無野入^⑤

同月十九日 中道新田泊 八時過野入

一 鶉 六

学之進

一 鳴 壺

同月廿日 払沢泊 風雨^④

一 鶉 四

兵庫

同月廿一日 同所逗留^⑦

一 風雨無野入

「 9才

同月廿二日 帰

一 無山^⑧

兵庫

今日風雨強其上肥候テ八半比^⑨

小屋場上ニテ^⑩

揚り七半比柳沢ニテ据上る^⑪

同月廿四日 柳沢泊^⑫

一 無山 八半過野入風雨甚強不遣^⑬

兵庫

同月廿五日 中新田泊風雨

一 鶉 四

今日大肥七時前ヨリ^⑭

同月廿六日 立沢泊 風強

一 鷓 三 同人

同月廿七日 同村逗留

一 休^⑦

「9ウ

同月廿八日 乙事泊風雨

一 鷓 五

寄不切^⑧

同人

一 雉児式^⑨

但雌雄共三四枚宛替り面丹ミ有り

今日肉宜面頭も余ほど直り

七寄ニテ七捉^⑩

同月廿九日 同村逗留

一 風雨

同月卅日 高森泊快晴風強

一 鷓 五ツ 五度外^⑪

寄分ケ

同人

八月朔日 乙事泊快晴昼前風強

一 鷓 七

今日より自分羽合^⑫

明日よりハ名を不記

「10オ

同月二日 中新田泊 風強 夕方計

一 鷓 三式度外ス

同月三日 弘沢泊 風雨 夕方野入

一 鷓 式

同月四日 穴山泊 風雨強

一 鷓 壺 今日切飼^⑬

同月五日 帰ル 十日塹へ放ス^⑭

ノ惣物数 百六十一

鷓 十五

鳴 十式

内 雲雀 百式十二

雉児 十内式大

河原鳴 壺

水鷄 壺

「10ウ

注(七月三日〜八月五日)

① 七月三日 七月三日から六日まで小淵沢方面瀬沢まで三泊(弘

沢・瀬沢・金沢泊)の遠出をしている。鷹匠は学之進で、この時期になっても獲物はほとんどが雲雀である。

② 八時〇ヤツドキ 午前二時から三時頃。まだ丑三つ時である。

夏の夜明けは早い、初秋、狩りをしながら弘沢まで野を歩く一日の始まりには少々早すぎる感もある。何か特別な事情があつて記録されたのであろう。

③ 手長上 手長が地名である。

④ 同月十八日 七月十八日から二十二日まで四泊(山田新田・中道新田・弘沢・弘沢泊)五日で獵に出ていた。山田・中道ともに弘沢に近く、それほど遠くはないが学之進・兵庫の二人で出かけ、悪天候に難渋している。獵期は限られているので少々無理は押

してでも出かける。

- ⑤ 無野入Ⅱノイリナシ 野に入ることにはなかった。山田新田まで来たのに道中狩が出来なかったのである。また、この部分は状況のメモであるにもかかわらず、捕獲鳥名の位置に記されている。このような書き振りは、その後二十一日「一風雨無野入」、二十二日「一無山」などと続いている。「一」を除去してもよいところである。

- ⑥ 風雨Ⅱフウウ 雨・風に祟られる。それでも一応狩に出て雲雀四羽を捕っている。

- ⑦ 同所逗留Ⅱドウシヨトウリユウ 雨・風のため所在無く払沢に留まる。

- ⑧ 無山Ⅱムザン 無残。残念。四泊五日の遠出だが、払沢で足止めでは残念である。狩は出来ず、鷹は運動不足で肥えてしまった。この日は鷹の訓練だけしている。

- ⑨ 肥候而Ⅱコエソウライテ（鷹が）肥えてしまつて。

- ⑩ 小屋場Ⅱコヤバ 鷹狩りのために作られた小屋のある所。鷹狩りはむやみやたらと野山へ入ったわけではなく、毎年決まった時期に行く狩場があり、そこに小屋掛けがしてあったことがわかる。

- ⑪ 据上るⅡスエアゲル 鷹を拳に据えて屋外で訓練をする。

- ⑫ 同月廿四日 七月二十四日から八月五日まで十一泊十二日の夏猟期最後を飾る大狩行である。鷹匠は兵庫（が主役）。

- ⑬ 八半過Ⅱヤツハンスギ 午前三時過ぎ。

- ⑭ 不遣Ⅱツカワズ 鷹を遣わなかった。午前三時から野へでも、終日鷹を遣えなかった天候不順に無山（無残）と記した鷹匠の苛

立ちがみえる。

- ⑮ 大肥Ⅱオオゴエ 肥えすぎ。本来狩りをするべき時に小屋にじつと待機していて鷹に肉が付き過ぎたのである。

- ⑯ 七時前ヨリ この後に「野入」が省略されている。西腕はますます肉がつき、風雨の中、午前四時頃から野に出て薄明かりの中で狩をさせ雲雀を四羽狩ったことが分かる。

- ⑰ 休Ⅱヤスム 狩の出先、立沢に逗留のままで休みを取っている。ちなみに立沢は中馬継宿の村である。

- ⑱ 寄不切Ⅱヨリキラス 獲物を追っていくとき諦めない。「ヨリキリ・カヘル 寄切歸。鳥をとり得ずして小鷹の飛行くをふけりを以って呼べば歸るをいふ。」（放 七〇〇頁）。西腕の体調がやや良くなってきたことを表している。

- ⑲ 雉児Ⅱキジノコ 次の但し書きによつて、雉児二羽は雌雄であつたこと、児といっても尾羽が三、四枚ずつ替り、面は赤みがあり、成鳥に近づいていることが分かる。

- ⑳ 七寄ニテ七捉Ⅱナナヨセニテナナドリ 七回獲物に羽合せて七回とも捕った。西腕の調子が筋肉も顔・頭の地肌の色艶もよほど良くなったと安堵を記している。

- ㉑ 五度外寄分ケⅡゴドハズシヨセワケ 十回獲物に羽合せたところ、五回外し五回は捕った。

- ㉒ 自分Ⅱジブン この物数帳をつけている人物である。以後自分が鷹を遣つて捕ったときは鷹匠名を記さないう。誰であろうか、興味をそえられる。この狩に出ているのは、記帳されているのは兵庫一人であるが、これだけの長旅であるから随行者が他の

鷹も携えて何人が居た事であろう。特定の鷹に付く鷹匠がそれほど多いとは思われず、このところずっと同行していた学之進あたりであろうか。

②③ 切飼Ⅱキリカイ 切餌で飼う。狩の間は「取飼」。従ってここで「狩は終わり」の意となる。

②④ 時へ放スⅡトヤへハナス 獵期を終え鳥屋へ入れる。

西腕辛酉（一八〇一年）物数（省略）

辛酉 総計 百四十五

外二小物五十斗不記

内

鶺鴒 四十七

内 合付頭四拾式

鶺鴒 四十五

雉子児十三

胸黒 三

水鶏 一

鶺鴒 三

背黒 一

鳴 十一

雀 十三

小むく 三

頬赤 二

鶺鴒 三

「23ウ

以上 「24オ

享和三王戌（一八〇二年）西腕両片時出物数（省略）

惣計

壬戌 六拾壹

内

鶺鴒 四十壹

鶺鴒 七

鳴 壹

胸黒 五

頬赤 三

頬白 三

雉児 一

但犬挟一

以上

「28ウ

享和三癸亥（一八〇三年）五才ノ春より

西腕物数 兵庫（省略）

癸亥 惣物数 七十

内

ヲバシギ 一

ヲケラ 三

鼠クイナ 二

羽斑 二

「34オ

文化元甲子（一八〇四）年 享和四 二月改元
 赤水鶏 五
 鵪 六
 小鳥 三十四
 鵪 十七
 七十
 34ウ

甲子 惣物数 三十五
 内
 鵪 三十一
 鳴 壺
 雉子児 壺
 鵪 式
 以上

37オ

文化二乙丑（一八〇五）年 物数（省略）

乙丑 惣物数 四百拾貳

内

鵪 五拾五
 鵪 百九十八
 鳴 拾貳
 鵪 壺
 雉子児 五

大むく 三
 小むく 壺
 河原鵪 壺
 羽斑鵪 四
 雀 六十五
 類白 三
 類赤 拾四
 百舌鳥 拾八
 赤水鶏 壺
 萱くくり式
 郭公 壺
 おけら 六
 せつか 式十一
 よしきり 壺
 以上
 54ウ

55オ

文化三丙寅（一八〇六）年（省略）

文化三 丙寅 惣物数

百二十一

内

鵪 七十六
 鵪 十七
 鳴 七
 類白 十

内からほうじろ一

鵲 七

雀 一

河原ひわ一

燕 一

尾長鳥 一

以上

「63才

本文10 (あとがき)

寛政十一己未産立ヨリ

文化三丙寅年迄総物数

千百八十七

外酉年小鳥不記分

五十程

文化四丁卯年本時飼

十分二替九月廿一日に

巢山エ還ス。甲六沢向老^②

ヶ森の上エ遣山崎忠蔵持^③

参也。未産立今年九歳

八時也。齡寿万年。

一同年霜月十八日忠蔵用

事有て山口エ参候所口留^④

之御番人久吉知ル人故立

「63ウ

寄嘶杯致ス内御番所脇

之さいカチ之木エ鶴居懸^⑤

りたるをもしやと存し廿間斗

寄りて見候所西腕に紛

へくもあらず。段々に寄て

懸声杯懸候得は見返り候

得共可参様子もなし。十間

斗に成て打出片輪に取^⑥

揚りて東の方へ落シ候羽振

格段するどふ成早々人手に

渡ル様子にあらず。尤鷹ノ形チ

顔先足^⑦のうらたこもいまだ

少し腫の残たる様子例態^⑧

羽遣ひ西腕に・ナシ。深く

奉祈誓シほとに無恙様子ヲ

明神のしらしめ給ふにこそ

とてよろこひしほとに我も

また感悦にたへす。環之得物^⑨

を神献して大祝某の主を^⑩

たのみて悦の奉幣し侍る。

益齡寿万年を祈奉る

事になん。

「64才

「64ウ

注（あとかき）

「65オ

① 丁卯＝ヒノトウ 文化四丁卯年は一八〇七年。

② 巢山＝スヤマ 幼鳥が巢鷹として捕獲された山。ここでは西腕の故郷の山。

③ 老ヶ森＝オイガモリ 飛驒の地名。

④ 口留＝クチドメ 江戸時代に、各藩が領内の物資の藩外への移出を禁じたこと。

⑤ さいカチの木 サイカチはマメ科の落葉高木。果実は生薬として利尿・去痰剤。若芽は食用。

⑥ 打出＝ウチダシ 羽を出し。ここでは鷹が羽を広げ半円を描いて舞い上がる。

⑦ 足のうらたこ 足の裏の腫瘍。足の裏の瘤。

⑧ 例様＝レイザマ いつもの様子。普通の状態。

⑨ 環之獲物＝ワノエモノ 連。藁で編んで環にした物に小鳥などの頭を挟みまとめた物。

⑩ 大祝＝オオハフリ 祝（ハフリ）は神に仕える者。禰宜の次位で祭祀などを行なう人。

訳（あとかき）

寛政十一己未年（一七九九年）に育てあげてから文化三丙寅年（一八〇六年）まで、西腕が捕った獲物の総数は

千百八十七羽

外に酉年に小鳥で記入しなかった分は五十羽ほど。

文化四丁卯年（一八〇七年）に換毛の鳥屋飼いを終り、十分に羽

毛も生え替わったので、九月二十一日に（九年前に捕ってきたと同じ）巢山へ返す。甲六沢に向いた老ヶ森の上へ 山崎忠蔵を遣わして西腕を持参させた。（九年前は）未だ飼育前の巢鷹であったのに、今年は九才で八回もの換毛を鳥屋で終えた。長寿万歳。

一、同年（一八〇七年）十一月十八日、忠蔵が用事があって山口へ参りましたところ、領内の物資の番人をしておりました久吉という男が知人でありましたので、立ち寄って四方山話などをして居りました内に、御番所の脇のサイカチの木へハイタカが止まって居りましたのを、もしや西腕ではないかと思ひ二十間ばかり近寄って見ましたところ、西腕に間違いありません。だんだんに近くへ寄って声などかけましたら見返りましたが、こちらへ参る様子もありません。十間ばかりの距離になって、羽を広げ、半円を描いて舞い上がり、東の方へ下りていきました。

その羽振りは格段に鋭くなり、早々に人手に渡っている様子ではありません。もともと鷹の体型、顔つき、足の裏の腫物が未だに少し残っている様子など、いつもの状態で、羽遣いも西腕に疑いありません。

（西腕の無事を）深く祈ったので（その気持ちに神に通じ）つつがない様子を明神が知らせて下さったのであらうと喜び、私も感悦にたえず、一連の獲物を神に奉げ、大祝の某神主を頼んで喜びの幣束を奉りました。

益々の長寿万年を祈り奉ったこととございます。

その五 飛騨西腕巣鵪物数潮 解説

西腕は八才まで遣われた。これは鵪として、長期に及ぶものであり、普通は四、五年といったところである。八年に亘る西腕の「物数年毎比較表」を下記のように纏めてみたので、それを参照していただきたい。

西腕、物数年毎比較表

一七九九年	一歳	七月十五日～九月十八日
総物数	百八十二	
内	ひばり一五九、鵪二、鳴一六	
一八〇〇年	二歳	三月二十二日～八月五日
総物数	百六十一	
内	ひばり一二二、鵪一五、鳴一二	
一八〇一年	三歳	二月二十三日～十月二日
総物数	百四十五	
内	ひばり四五、鵪四七、鳴一一	
一八〇二年	四歳	八月八日～十月十一日
総物数	六十一	
内	ひばり四一、鵪七、鳴一	
一八〇三年	五歳	三月十四日～七月四日
総物数	七十	
内	ひばり〇、鵪一七、鳴一	
一八〇四年	六歳	八月四日～十月五日

総物数 三十五

内 ひばり三一、鵪二、鳴一

一八〇五年 七歳 三月一日～八月二十八日

総物数 四百二十一

内 ひばり一九八、鵪五五、鳴二二

一八〇六年 八歳 四月二十五日～十月十五日

総物数 百二十一

中 ひばり七六、鵪一七、鳴七

【八年間の総物数】

ひばり六七二、鵪一六二、鳴六一

* * *

尚、八年間のその他の獲物は、おけら（＝啄木鳥）八、尾長一、郭公一、萱くくり一、川原鳴二、河原ひわ一、雉子児三二（内、大二）、水鶏一〇（内、クイナ一、鼠クイナ二、赤クイナ六）、雀七九、背黒一、セツカ二、鵪四、燕一、羽斑鳴六、頬丹（＝頬赤）一二二、頬白一六（内、からほうじろ二）、椋鳥七（内、大むく三、小むく四）、胸黒鳴八、鵪三四、ヨシキリ一、ヲバシギ（＝姥鵪）一、その他の小鳥三四であった。

補足であるがせつか（雪加・雪下）は文化二（一八〇五）年にのみ、しかも二十一羽捕獲されている。ウグイス科の小鳥でヨーロッパ南部・アフリカ・アジア南部に分布するが、日本では本州以南の草原・葦原で繁殖し、冬は暖地に渡る。諏訪地方は生息北限で高温の年に狩られたのであろうか。この年には雪加の他にも「萱くくり」・「よしきり」など例年には見られない珍しい小鳥が狩られている。

各年の遭われた時期を見ると、遭われ始めは、早くて二月から、遅くて八月になってからと、ばらつきがある。鵠狩は「小鷹狩」の一つであり、それは普通には大鷹狩の狩猟期が終わる晩春から、大鷹狩の代償として、又放鷹術の維持・研鑽のためとして、さらには時期の異なった獲物の猟法術習得や異なった鳥の食味嗜好を得るもの(全体解説「鳥柴の風」参照)として行なわれた。鵠狩の遭われ終いも、九月初旬から十月中旬とやはり相当な開きがある。江戸時代の十月といえ、今では十一月に当たり、その頃には大鷹狩が始まっている時期である。

物数に注目すると、雲雀が最も多く六七二羽に達している。それに比して鵠の数が一六二羽と少ないのが注目される。「春は雲雀、秋は鵠」とされており、鳥柴の風習もこれに準拠して飾り立てられている。雲雀は殆んど時期を問わず「小鷹狩」の期間、獲物とされている事実が明らかとなった。これが「小鷹狩」の実態なのであるうか、それとも諏訪地方の特殊事情に基づくものであろうか。他の地方と比較してみたいところである。

上の表には、雲雀・鵠と並んで鳴を主要物数の鳥と記してある。というのは鳴は毎年数多く獲られているし、「物数潮」の上位に記されているからである。さらに鳴には、同種の川原鳴、羽斑、胸黒、姥鳴があり、別に記されているが、それらを一括して括ったら相当数に上ろう。

雀も物数に入れているが、これは別の獲物に鵠を放ったところ、近くに飛んで来たか、舞い上がったものを獲ってしまったものであ

ろう。雀は鷹匠付きの餌差しが専門に捕らえるものであって、余程のことが無い限り鷹狩の対象にはならない。

鵠にとつては大物である雉も、物数としては三一羽とらえたことになる。が、さすがに成鳥を捕らえたわけではない。幼鳥である「雉子児」と明記してある。しかし幼鳥でも相当大きくなったものを捕らえたのであろう、三一羽の中に(内、大二)とこれも注記して入れている。鷹匠の感動のうちに記す様を読み取ることができよう。

水鶏や郭公、雉子児それに「鳴」の他に別記された上記鳴類は、鵠よりは体が大物であるが、他の獲物は鵠と同じぐらいか、それ以下の獲物であり、雀(全長約15cm)以下のものが多い。上の表の「その他の獲物」一覧をみても、鵠がその小さな体形からして、鳴や雉以上のものを狙う大鷹との相違を明らかにしている。

最後に、ここでは省略した西腕の三歳から八歳に至る狩猟内容を概観しておくことにする。八年の長きにわたって狩猟し続けたハイタカ西腕と鷹匠の日常は決して平坦なものではなかったことが知られるのである。

一八〇一年(三歳)は西腕の体調が悪かったようである。春二月二十三日から野に出て取飼いをさせているが、前年八月十日に鳥屋入りをさせ、冬中切飼いをしたもの、二月になってようやく尾羽が替わっただけで、背甲・七並(翼)の毛は半分しか生えかわっておらず、中央の尾羽である上尾は再び抜け落ちる始末、二月は勿論、三月も狩猟はほとんど不能であった模様である。物数も三月二十五日の鳴一・雀五が最も豊猟の日で、大半は捕獲数ゼロか一といった

獵果である。二月二十九日から四月二十二日まで獵も休ませている。

四月二十三日から再び獵に出しているが、「肉甲斐なく……虫を吐」という状態で虫薬を飲ませて一ヶ月間休ませたと記している。

また四月二十五日は鶉二羽の獵果を示しているが、「是より後、小物は不記」との書き込みがあり、総計のメモにより、記されなかった小物（小鳥）は五十羽ほどであったことが分かる。この小物が具体的にどのような種類の鳥であったかは不明である。

また雲雀については、六月二十九日より雲雀の兎、七月九日より雲雀三羽の獵果が記されているが、この年は、氣候が不順で雲雀の最盛期が常の年のようにはいかなかったとのメモが散見される。

七月十一日に「此度、鶉はまだ早し。」

七月十三日に「鶉ノ旬ハ山浦ヨリハよろしく孫太郎海ノ口にて八羽合候。何も四枚位也。」

七月十九日に「ジンドウ（尾の落ちて無い雲雀）二枚持。去年七月中（一年を十二ヶ月に分けた各月の後半の称。中氣。）ヨリ五、六日目頃ひな多く鳴く由也。今十九日ハ七月中ヨリ五日也。至而鳥遠、其上ヨリ申さず候。

……後略……」

と、昨年は盆の頃一斉に鳴き出したが、此の年は盛んになるかと思う頃から天氣が続いて、盆の頃は雨勝ち、雛も早々に里山から遠くなつたと嘆いている。七月二十四日には「鶉五羽」の記事があるが、「十九日ヨリ大風雨有候故か。鶉ハ勿論諸鳥一向ニ不見」である。八月、九月も思わしくなく、十月二日まで獵には出ているが、ほとんど獵果はなく終っている。此の年は鶉が捕れた他は、獵期の長い

割に物数総計は少なかったと言える。

一八〇二年（四歳）も西腕は三月二十五から鳥屋に入れ、順調な換毛を願ったが不順で、ようよう縊り出した一ノ羽・二ノ羽も血が付いていたと最初に記す。獵期も八月八日から十月一日までと短く、獵果も総物数六一羽と少ない。しかも、八月二十一日までは西腕の様子を見ながら「不遣（つかわず）」のメモが散見する。しかし、「外シナシ」「無外」のメモもあり、獵をさせてみれば上手く捕つてはいるようである。

しかしながら八月二十一日に「当（八月）九日比ヨリ手先ノ羽少シゆるみ候様見え候所、九日は羽振も宜。十日ヨリ又々追羽カイナク見え肉ニか若羽痛か分かりかね……」と休ませるなどの記事もあり、翌二十二日には別のハイタカ「秋山」を遣つて西腕の訓練をさせている記事も見えている。

此の年は西腕の他に「秋山」「犬頭」「大遠」などのハイタカを同道させており、物数（獵果）の中に、これらの捕つたもの、または加勢したものが入っている可能性もある。

一八〇三年（五歳）は三月十四日から七月四日までの獵である。獵をさせた時期が短いので総物数も少なく、例年なら捕獲数一番の雲雀も、この年ばかりは旬の七月中・下旬は既に引き上げているためゼロである。七月四日には水鳥屋みずとやに入れて養生させている。

一八〇四年（六歳）は鳥屋での換毛が少し遅れ、七月二十一日にようやく鳥屋から出して架はしらに繫いだが見える。八月四日から十月五日まで遣っているが、実態は八月十日に「未血羽多、風ヲ嫌、肉も詰悪ク……」と放ち飼いにし、九月十日より再び据えて、九月

二十四日と十月五日でこの年を切り上げている。西腕八年のうちで最悪の年と言うべきか。物数わずか七十羽である。

一八〇五年（七歳）は三月一日から八月二十八日まで十分に遣い、総物数も四一二羽と西腕の最も活躍した年とも言える。主たる鷹匠も助七郎と鏝之進に替わっている。またこの物数帳の筆跡も変わっている。多分助七郎か鏝之進の文字であろう。

一八〇六年（八歳）は四月二十五・二十六・二十八日と三日間猟をさせると五月一日から水鳥屋へ放ち休ませ、七月十八日から助七郎による据え回しが始まっている。この年の総物数は一二一羽と決して少なくはないし、猟期も十月十五日と長い。しかし八月・九月・十月も猟に専念させるというより、犬頭など他のハイタカと共に野に出したということであつたのかもしれない。

「二鶉 一 拳」

のような鷹匠名の位置に「拳」の字が見える部分がある。鷹匠名とは思にくい文字であり、この猟に関しては拳に据えて見せた又は挙げてみたという記録であろうかとも考えた。如何なものであろうか。

この年、西腕はかなり弱りを見せていたようで、「追羽無甲斐」「鷹弱し」などと記されたり、「葉飼」「放切飼」「水罫へ放ス」など西腕への労りが見えている。このような状況のなかで翌年九月、十分に換毛の完了したところで巢山へ返す決心がされたのであろう。